

地域社会により順応するための方言教材作成のための方言データベースの開発について

著者	大山 浩美, 馬場 良二, 和田 礼子, 田川 恭識, 嵐 洋子, 島本 智美, 吉里 さちこ, 大庭 理恵子
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	2
ページ	233-238
発行年	2017
URL	http://doi.org/10.15084/00001524

地域社会により順応するための方言教材作成のための方言データベースの開発について

大山浩美 (Apple Japan Inc.)[†] 馬場良二 (熊本県立大学)[†]
和田礼子 (鹿児島大学) 田川恭識 (神奈川大学)
嵐洋子 (杏林大学) 島本智美 (熊本県立大学)
吉里さちこ (熊本大学) 大庭理恵子 (熊本県立大学)

Developing a kumamoto dialect database to make a learning material for non-native Japanese speakers to accommodate a local society

Hiromi Oyama (Apple Japan, INC.) Ryoji Baba (Prefectural University of Kumamoto)

Reiko Wada (University of Kagoshima) Yukinori Tagawa (Kanagawa University)

Yoko Arashi (Kyorin University) Tomomi Shimamoto (Prefectural University of Kumamoto)

Sachiko Yoshisato (University of Kumamoto) Rieko Oba (Prefectural University of Kumamoto)

要旨

言語には様々な異種が存在する。方言（ここでは特に地域方言）はその一つである。同じ日本語であっても様々な方言があり、別の言語であるかと思うほど理解し合えない時もある。本研究グループでは、「熊本方言を話せなくてもいいから理解できる」ということを目指し、留学生を対象とした熊本方言の特徴を学ぶ教科書『話してみらんね さしより！熊本弁』（「さしより」とは共通語では「とりあえず」という意味の熊本方言である）を作成した。さらに中上級者用の教材としてデータベース型教材を同時に開発している。そのデータベースを作成する際に、熊本方言話者の会話データを収集し、デジタル化し、方言タグを付与し、方言データベースを作成した。そのデータベースでは、収集した会話データにおいて方言要素を抽出し、教材作成者（熊本方言話者）が内省を施し使用頻度が高いと思われる方言を選んだ。熊本方言といっても各地域によって大きく異なるため、熊本市で使われる方言に限定し、方言の世代差についても、大学生の使用を念頭において選定した。本稿では、熊本方言話者の会話データにおいてどのような方言要素を抽出し、方言タグを付与し、データベース化したのかについて述べる。

1. はじめに

地方に在住する日本語非母語話者に対する支援の必要性は年々高まっている。本研究グループでは、地方在住の日本語学習者がその地域社会により順応できるようにするための方言教材の作成とその方法論の構築を最終的な目的とし、方言データベースの開発を行っている。私たちはこれまでに留学生のための熊本方言初級教材『話してみらんね さしより！熊本弁』、さらに熊本方言中上級教材を作成した。この初級教材では「質問する、誘う、断る」という機能ごとにモデル会話を作成し、特に熊本方言の中の文末表現を取り上げ、練習問題やモデル音声をつけた。その作成の際に、中上級学習者はより多様な熊本方言に接することが予測され、機能シラバスや場面シラバスの教材では対応しきれないと考えられるようになった。そこで、中上級の方言教材用として、日本語学習者が耳にした方言形式を

[†] hiromi.oyama@gmail.com

^{††} babaryoj@pu-kumamoto.ac.jp

検索し、その意味や文例を調べることのできるデータベース型の教材の作成を目指した。本稿ではこの方言データベースの開発について報告する。

2. データベースへのタグ付けについて

2-1. タグをつける方言要素について

秋山（1983）の「熊本県の方言」によると、熊本言要素の中でも特に熊本北部方言として表1のような方言要素が取り上げられている。その秋山（1983）の分類に従い、それぞれの方言要素で、終助詞を含む文末表現は「end」、接続法は「conj」、限定法は「only」、主格法は「case」、カ語尾は「ka」といったタグをつけることとした。

表 1 秋山（1983）の熊本方言分類

項目	方言要素	例	タグ
終助詞	ナー／ネー／バイ ／タイ／モン／コ テ／ト／ツ／カタ	暑カッタタイ（暑かったね）	end
接続法	ケン／チャ／バッ テン	言ウタッチャ聴カントサナ（言ってもかなければ何にもならない）	conj
条件接続	サガ	ソギヤングスリヨットサガ（そんなにぐずぐず不平を言うなら）	conj
限定法	バシ：強意／サカ・ シャカ：さえ／シ コ：だけ／シャ	*アヤツァーハラカイテバシオットダロカ（あいつは、ひよっとしたら怒ってでもいるのかしらん） *ドガシコカネノイルモネロ（どれだけ金が必要なものやら） *オカッシャスル（とてもおもしろがる）	only
主格法	ノ：が	子ドモノ泣キヨル（子どもが泣いている）	case
形容詞	カ語尾	善カ（善い）、暑カ（暑い）、美シカ（美しい）	ka
形容動詞	カ語尾	達者カ（達者だ）、面倒カ／ナ（面倒だ）、変ナカ（変だな）	ka
形容詞	イ語尾	サミー（寒い）、ヤシー（安い）、ヒデー（ひどい）	son ¹

秋山（1983）で取り上げられた熊本方言要素以外に、熊本方言話者の自然会話データから、表2のような熊本方言要素が抽出された。それらにおいて、文末表現には「end」、接続法には「conj」、助詞には「case」、指示詞には「dem」、定型表現には「ph」、語彙には「voc」、

¹ この「形容詞のイ語尾」は音声(son)の方言とした。

否定には「neg」、否定・活用には「neg/jug」、動詞・活用には「ver/jug」、形容詞・活用には「adj/jug」、敬語には「hon」、音変化には「son」、アスペクトには「time」、可能形には「can」、準体助詞には「qn」などのタグを付与することとした。

当初、秋山（1983）の主格法を「case」としていたが、自然談話では格助詞全般に熊本方言要素が現れるため、主格「ノ」を含む格助詞を「case」とした。また、「ケン」のように、接続表現としても文末表現としても使用される語については、文末に位置していても、明らかに述部を省略した「言いさし表現」である場合は「conj」を、それがなくモダリティ的要素を含む場合は「end」をつけることにした。さらに、「ト」は「どこに行くト？」のように終助詞として使われていれば「end」、「着るトのなか。（着る物がない）」の場合は準体助詞として「qn」というタグをつけた。

表 2 本研究グループの方言分類

項目	方言要素	例	タグ
文末	ケン／ダロ／ド／ ダン／モン ガ／ツ／ネ	*アソコニオッタケン（あそこにいたよ） *田中サンダロ（田中さんでしょ） *知ットルド？（知ってるでしょ？） *ラーメンハ嫌イダン（ラーメンは嫌いだ！） *昨日通ッタモン（昨日、通ったもの） *田中サンハ来ラスガ（田中さんは来るに決まっている） *明日テストノアルツタイ（明日、テストがあるんだ） *ハヨ、アガランネ（早くあがりなさいよ）	end
接続法	ケンガ／ケンガラ ／デン	*大人デン子ドモデン（大人でも子どもでも）	conj
助詞	サン／テ／バ	*中学校ノ方サン行く（中学校の方に行く） *～テ何？（～って何？） *オ湯バ入レル（お湯を入れる）	case
指示詞	アガン／アギャン ／アン	*アガンコトスルトイカン（あんなことをするといけない） *アン人（あの人）	dem
定型表現	ナン／φイク／ゴ タル／タガヨカ／ タガハヤカ φギヤイク／φナ ル／チャヨカ／デ	*行カナン（行かなければならない） *食ベイク（食べに行く） *語ロゴタル（話したい） *行ッタガヨカ（行った方がいい） *行ッタガハヤカ（行った方がはやい）	ph

	ス／テアルカ／ト デケン／ンクナル	*食べギヤ行ク (食べに行く) *サムナル (寒くなる) *見ランチャヨカ (見なくてもいい) *行クデス (行きます) *使ウテアルカ (使うなんてだめじゃないか) *飲ムトデケン (飲んではいけない) *食ベンクナル (食べなくなる)	
語彙	オル／エライ／タ イギヤ ソスト／ダイケン ／チット／マゴ／ イケン	*猫ノオル (猫がいる) *エライ (とても) * *タイギヤ (とても) *ソスト (そうしたら) *ダイケン (だから) *チット (少し) *マゴ速カ (とても速い) *今日ハ体調ガ悪カケン, ゴ飯ノイケン (今日は体調が悪いから, 食欲がない)	voc
否定	ン	*知ラン (知らん) *ワカラン (分からん) *行カン (行かん) *セン (しない)	neg
否定・活用	ンダッタ	*出ランダッタ (出なかった)	neg/jug
動詞・活用	ユウタ／コユル／ デクル／ラルル	*ユウタ (言った) *コユル (越える) *デクル (できる) *怒ラルル (怒られる)	ver/jug
形容詞・活用	カッタ／クナイ	*カワイソカッタ (かわいそうだった) *得意クナイ (得意じゃない)	adj/jug
敬語 (卑語)	ラス／ナハル／ラ ル／ナッセ	*見ラス (ご覧になる) *食べナハル (召し上がる) *ヤメライタ (やめてしまった) *行キナッセ (行きなさい)	hon
音変化	コッ／アッ	*同ジコッタイ (同じことだよ) *アットタイ (あるんだよ)	son
アスペク ト	ヨル／トル／ヨク ／トク／アッテイ ル	*食べヨル (食べている) *ヒビガ入ットル (ひびが入っている) *先ニ行キヨクネ (先に行っているよ)	time

		*先ニ行ツトクネ (先に行っているよ) *会議ガアッテイル (会議中だ)	
可能形	ユル／ルル／キル	*聞コユル (聞こえる) *行カルル (行ける) *食イキラン (食べられない)	can
準体助詞	ト	*着ルトノナカ (着る物がない)	qn

2-2. タグつけ方法について

タグには、XMLタグを用いた。方言を抜き出す範囲としては、5文節程度を上限とし、方言を抜き出す範囲を以下のタグで区切る。方言を含む範囲を<hg></hg>タグで括った。その中に要素項目「target=」（方言を含む文節全て）, 「bs=」（さらに細かい文節）, 「kihon=」（基本形）, 「type=」（方言の種類）」の情報を付与した。下の図を一例として紹介する。

<p>B: あ、そうそう。(だけんね、) (A: うん) 短…長いときは全然(気にならんかったわけ) (A: うん) その、(何ヶ月(ほっといっても) ただ下が伸びてくるだけでしょ) (A: うん) 色もずっと黒かったし。 (A: うん) でもこんなやつ(切ってしまったらね、) (なんて言うど) この、切った (A: あ、) 切り口とか気になるわけ。</p> <p style="font-size: small; margin-left: 20px;"> g'テン voc ンカッタ neg./jug ト time タラ cond ト end </p>
--

図 1 会話データ一例

図1において、青い(大きい)開始かつこの部分に半角で<hg target=「…」のタグを入れる。赤の(小さい)括弧の部分は、方言要素を含むさらに細かい文節で、「bs=」のタグを挿入する。図1の会話例一行目のBの発話には以下のようなタグをつけた。

```
<hg target= 'だけんね. 短…長いときは全然きにならんかったわけ' bs= 'だけんね. '
kihon= 'ダケン' type= 'voc' bs1= '気にならんかったわけ' kihon1= 'ンカッタ' type1=
'neg/jug' ></hg>
```

<hg>の中に複数の方言要素を含む文節が現れた場合、そのまとまりを<bs>タグでくくる。<bs>が複数ある場合、先頭は数値を振らず、以降1, 2…と通し番号を付けた。<bs>の範囲に複数の方言要素が現れる場合(例えばbs1とbs2の中に、それぞれふたつの方言要素がある場合)、以下のように記述した。

```
bs1= '◇◇' kihon1= '○○' type1= '▽▽' kihon1-1= '☆☆' type1-1= '□□'
bs2= '◆◆' kihon2= '●●' type2= '▼▼' kihon2-1= '★★' type2-1= '■■'
```

<hg target= ‘ビニールば着てからごろごろ寝とったろうが’ bs= ‘ビニールば’ kihon= ‘バ’ type= ‘case’ bs1= ‘着てから’ kihon1= ‘テカラ’ type1= ‘conj’ bs2= ‘寝とったろうが’ kihon2= ‘ツ’ type2= ‘son’ kihon2-1= ‘トル’ type2-1= ‘time’ kihon2-2= ‘ガ’ type2-2= ‘time’></hg>

3. まとめ

本稿では、地方在住の日本語学習者がその地域社会により順応できるようにするための方言教材を目指し作成した方言データベース開発について述べた。共通語を教える際にも言えることであるが、学習者が実際の日本の社会に出て見聞きする日本語が自分たちが教室で学習した日本語と異なると感じることはよくあることである。そういったことが地方在住の日本語学習者が方言と出会った時に困難を伴い発生する。日本語をどんなに学習していても熊本弁だけでいきなり話しかけられたら全く理解できないのはごく当然のことだと思われる。そのため、本研究グループでは方言が話されている地域社会で実際に使われているのはどんな言語、表現なのかを実際のデータを収集し、分析し、データベース化した。現在は、熊本方言の教科書の開発を主な目標としているが、この自然言語を収集し、データベース化し、教材として用いる方法は、教材開発の方法論としても役立つものと思われる。

謝 辞

本研究は H27－H30 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）, 研究課題番号 15H03218, 研究代表者：馬場良二, タイトル「地域後によるコミュニケーションを支援する聞き取り学習システムの開発と方法論の構築」）を受けたものである。

文 献

秋山正次(1983)「熊本県の方言」『講座方言学 9 -九州地方の方言-』,国書刊行会,pp207-223